

希少猛禽類調査 (イヌワシ・クマタカ)の生態等に関する結果概要

項目	イヌワシ	クマタカ
ペア行動圏	<p>現地調査では90～130km²。 既存資料では最も小さいもので21km²、大きいもので200km²。 生息密度が高いと行動圏は小さい。 繁殖期に小さくなり、非繁殖期に広がる。 行動圏及び高利用域(営巣地、ハンティングエリア及びねぐらを含む。)は雌雄で重複し、性差はほとんど見られない。</p>	<p>現地調査では10～25km²。 既存資料では最も小さいもので10km²未満、大きいもので50km²。 行動圏の大きさは、地形、隣接ペアの有無、生息密度等が影響している。 滋賀では雌雄の行動圏の重複率は70%前後であった。 雌の行動圏は抱卵期と巣内育雛期に小さくなるが、全体としては大きく変化しない。 雌雄とも月によって異なったエリアを利用。 通常の行動圏から外れて遠出する雌もいる。</p>
行亜動成圏鳥	-	<p>滋賀では135.5km²。 1地域に数週間滞在した後、大きな移動というパターンを繰り返す。</p>
幼鳥行動圏等	-	<p>滋賀では巣立ち翌々年2月(2ヶ月)まで親の行動圏内に滞在し、親が給餌を行った。 滋賀では巣立ち翌々年3月から分散及び親の追い出し行動が見られた。 幼鳥の死亡は巣立ち翌年の3月(巣立ち後10ヶ月)までが多い。</p>
ハンティングと食性	<p>獲物よりも高い位置で探索し、発見とともに急降下する。 餌としてはノウサギ、ヤマドリ及びヘビ類が重要だが地域差がある。ニホンジカ及びニホンカモシカの死肉を食べた例もある。</p>	<p>止まり型と飛行型に大別される。 ハンティングエリアは高利用域内の他高利用域から離れた飛び地にもある。 餌としてはノウサギ、ヘビ類及びヤマドリが重要。哺乳類、鳥類、爬虫類(ヘビ類)と50種に及ぶ。 エゾシカ及びイノシシの死肉を食べた例もある。</p>
成功率	全国的に明らかな低下傾向にある。	全国的に低下傾向にあるが、地域・年によって異なる。
営巣地と巣間距離の特徴	<p>急峻な地形。 標高500～1000m。 ペア行動圏内における最高標高の1/2前後またはそれ以下の標高に多い。 オーバーハングした岩棚、岩穴、針葉樹高木等に営巣する。 複数の代替巣を有するが、最も条件の良い巣を長年利用する。 岩手では巣間距離は10～25km。隣接つがいの有無及び地形条件により異なる。</p>	<p>標高は300～800m。 ペア行動圏内における最高標高の1/2より低い標高に多い。 傾斜20～50度の谷の急斜面の樹上に営巣する。 営巣木としてはアカマツ、スギ、モミ、ツガ、キタゴヨウ等常緑針葉樹が好まれるが、ブナ、ミズナラ、トチノキ、シイカシ類の場合もあり多様。枝が横に張りだし、枝間に空間がある大径木が多い。 既存資料では巣間距離は2～6km。自然条件により地域差がある。</p>
就峙	<p>繁殖期(冬～春)は営巣地の近く。夏期は営巣地から離れた場所に移動する。 繁殖期はペアのねぐらは同じ谷。それ以外の時期は別の場所にある。 ほとんどが樹上。谷の中腹から溪流に近い谷奥に生育する樹上が多い。</p>	-

項目	イヌワシ	クマタカ
誇示行動	求愛行動は秋に営巣地に比較的近いところで行われる。排他行動は巣内育雛期に行動圏の境界付近で頻繁に行われる。波状飛行が最も多い。	-
指標行動	-	なわばりを防衛するための行動として波状飛行、V字飛行等の他、求愛期に特有な行動、繁殖に向けた行動等、計29種類の指標行動に識別された。
種間関係	イヌワシとクマタカの行動圏が重なる場合でも、直接遭遇や攻撃行動等の種間干渉はほとんど見られなかった。カラス類やトビ、ハチクマ、オオタカ、ノスリ等の猛禽類に対しては追い出し行動等が見られた。	イヌワシとの種間干渉と思われる行動は観察されなかった。カケス、カラス類、トビ、ノスリ等との種間関係では優位に立っている。
生活地域サイクルの	-	地域により1～2ヶ月程度の差があり、西方の暖かい地域ほど、繁殖期入り、産卵、育雛、幼鳥の巣立ち等が早い傾向があるが個体差がある。積雪量も影響している。
生息環境(植生)	石川では自然植生が90%以上、岩手及び秋田では自然植生と代償植生で60～70%、滋賀、兵庫及び大分ではスギ・ヒノキ植林が30%以上となっており地域差が大きい。 スギ・ヒノキ植林の割合は最大でも約1/3。代償植生の割合が高い地域にも生息する。 高利用域内のハンティングエリアとして、草原、伐採跡地、裸地等の開放的な空間や、夏緑広葉樹林、植林地等でも内部に空間がある植生状態が重要となる。 奈良のイヌワシ消失事例では、スギ・ヒノキ植林が増加し、全体的にうっ閉した植生になっていた。	林内利用が可能な樹高10m以上の高木林が多いが、様々なタイプの森林(宮崎では常緑広葉樹2次林、滋賀では落葉広葉樹林とスギ・ヒノキ人工林、山形ではブナ自然林を含む落葉広葉樹林)、オープンエリア(宮崎県では伐採跡地、山形県は草本群落)に適応している。 ハンティングエリアとしてよく利用されるのは、群落高10～20m以上の高木林で、林冠にギャップがあり林内も見わたしやすい森林、伐採跡地、草本群落、自然裸地といった開放的な植生環境が多い。 林内構造は高木層、亜高木層、低木層、草本層の階層構造が発達し、巣への出入りが容易となっている。
テレメトリー調査の特性	-	翼帯マーカ―とテレメトリー調査の併用により個体の追跡率が格段に上昇した。 アクトグラムの使用により個体の位置・行動の推定が可能となった。 テレメトリー調査は個体に負担をかけるためアセスメント調査等での実施は困難である。目視による調査結果でも全体像が類推できるようなシステムの構築が今後の課題である。
潜在的な分布領域推定	-	生息を左右する自然条件は、植生自然度、傾斜度、標高、標高差等である。 岩手県で試行したところ、実際の分布状況と比較して約80%の判別率であった。 汎用性があるモデルの構築が今後の課題である。